

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「問題行動への対応」～基本的な考え方～

1 発想の転換

- ・問題行動をなくすより、適切な行動を増やすと考える。
- ・問題行動をなくす支援から、起きない支援を考える。
- ・問題行動への対応で最も有効な方法は、予防的かつ早期対応である。
- ・問題行動を「問題」ではなく、「支援の手掛かり」と考える。

2 子どもと環境との相互作用という点から捉える

- ・問題行動への対応は、個人の行動への支援と環境整備を行う。環境の中で見付け出せた原因を改善・除去する。ある行動が実行される「直前」にどんなことが起こっていたか、（働きかけ方）そして、ある行動が実行された「直後」にどんなことが生じて、どんな対応をしていたか（応え方）を明らかにする。行動の「直前」と「直後」のきっかけや状況を観察・分析し、そのきっかけや状況を変えて行動の改善を図る。行動を起こし、結果によいことが起こると、その行動は増える。

3 行動の原則（よいことをすればよいことが起こる、悪いことをすれば悪いことが起こる）

- （1）ある行動の結果が快ならば、その行動は増える。（快の増加→その行動が増加）
- （2）ある行動の結果が不快ならば、その行動は減少する。（不快の増加→その行動が減少）
- （3）ある行動を起こしても、結果として何の変化も起きないとき、その行動は減少する。（快の消去→その行動が減少）
- （4）ある行動を行うことにより不快な結果が避けられる場合、その行動は増える。（不快の消去→その行動が増加）

【誤りやすい例】

×悪いことをしたのに、よいことが起こる

例：パニックを起こしたら、体育館で遊ばせてもらえた。
→快の増加となり、その行動は増えていく。

×よいことをしたのに、悪いことが起こる

例：課題を速く完成させたら、すぐに次の課題を渡された。
→不快の増加となり、その行動は減少していく。



- ・人間の行動は、一方が増えると一方が減る。問題行動は経験による誤学習・未学習と捉え、望ましい行動を指導する。
- ・子どものよい行動を当たり前の行動として捉えてしまい、注目しないことが多い。注目されなくなると、その行動は減少し消失する。よい行動をしているときは、忘れずに肯定的な注目をする。

子どもは注目をされると・・・

- ①この次もその行動をしようとする。
- ②自分は認められていると感じて自信がもてる。
- ③他のことでも認められようと頑張る。

肯定的な注目とは・・・

- ①ほめる：「すごいね」「さすがだね」「優しいね」
- ②励ます：「自信がついたね」「もう少しだよ」
- ③気付く：「片付けしてるね」「課題に取りかかったね」
- ④感謝する：「～してくれてありがとう。助かったよ」
- ⑤喜ぶ、驚く：「うあー、とても細かく描けたね」



4 事前に枠組み（暗黙のルール、期待等）を設定する→自由と管理のバランス

- ・騒いで物を投げたとしても、叱るのではなく約束を思い出させてやり直しさせ、できたら（我慢したら）ほめると、次につながっていく。
- ・してはいけないことを教えるのではなく、どうしたらその子の望むことができるのかを教える。（否定的ではなく、肯定的な対応）
- ・子どもの後追いよりは、「前に立って」目標を掲げ、見通しを示し、モデルを見せ、一緒に行うと、子どもからの信頼度はぐっと高まる。

5 行動を3つに整理して支援する

- （1）増やしたい行動（自ら挨拶をする）→ほめる。（即座に、具体的に、タイミングよく）
- （2）減らしたい行動（屁理屈を言う）→注目を取り去り、増やしたい行動を待つ。最後はほめて終わる。
- （3）許しがたい行動（人を叩く 物を投げる）→制限を設ける、警告する、ペナルティーを与える。最後はほめて終わる。

6 行動を3つの視点から分類して支援する

分類1 「分からない」（自閉的な視点）

言われたこと、相手の気持ち、関わり方が分からない！

→適切な行動や要求の仕方を分かる言葉で説明する、モデルを示したり、ロールプレイで練習したりする。

→見えないもの（相手の気持ち、場の状況）を見えるように、視覚的手がかりを活用する。

分類2 「うっかり」（ADHD的な視点）

注意集中・持続が困難で、刺激を選択、衝動を抑制できなくてうっかり！

→見通しがもてるように、活動の時間・場所・内容・手順・ゴールを示す。

→刺激を減らす、活動を細切れに用意する、体を動かす活動を取り入れて気分転換を図る。

→事前に約束やルールを確認する、興味・関心ある活動や得意な活動を用意する。

分類3 「わざと」（ストレスがかかっている 幼い）

注目してほしくて、その言動でいいことがあった記憶からわざと！

→言動を注目しない、適切な行動をすぐほめる。

→ほめると無反応（知らんぷり）を組み合わせる。

→1対1で関わる時間をもつ。

→本人に応じた難度の課題を設定する。



「一日10回 子どもをほめるポイント」

- 1 気が付いたとき、その場ですぐにほめる
- 2 ほめられたことが分かるようにほめる
- 3 小さなことでも、できたらほめる
- 4 短く分かりやすい言葉でほめる
- 5 得意なことを見つけてほめる
- 6 勉強以外のことをほめる
- 7 結果より過程に着目してほめる
- 8 感性や発想力をほめる
- 9 苦手なことも長所に置き換えてほめる（リフレーミング）
- 10 叱る回数よりもほめる回数を多くする



子どものいいところやできることに注目する癖を付けると、見えてくる景色も変わってきます。子どもの小さな変化に気付いて、「あなたを見ています」というサインを送り続けるだけで、子どもを変える大きなパワーになります。

「いつも頑張っている〇〇さん」「みんなに優しい〇〇さん」と、名前を呼びましょう！